



Prologue

01

北欧の国 ストックホルムより(5)

News

02

デンマークでの事業説明
来会記録
日本大使館主催新年祝賀会

Reports

04

2012ノーベルウィーク
東北大学リエゾンオフィス設置
日本人研究者へのインタビュー

Academic Information

09

新カロリンスカ医科大学長の就任
スウェーデン高等教育関係機関の統合
リサーチカウンシルの2013年度助成金の発表
欧州未来新興技術フラッグシップ

Notice

11

セミナー・シンポジウムの開催
外国人特別研究員事業(欧米短期&一般)
JSPS Stockholm News Letter 定期購読

北欧の国 スtockホルムより(5) スウェーデンで環境問題と原発を考える

JSPSストックホルム研究連絡センター長 藤井 義明

一年間ストックホルムで生活してみると、ストックホルムは大変住みよい街である事がわかります。ロンドンでは2階立バス、ダブルデッカーが有名ですが、ストックホルムでは2両連結のバスが街を縦横に走っています。地下鉄の交通網も良く発達していますので、街のどこへ行くのにも、この2つの公共の乗り物を、乗り継いで行くことができます。その上切符が共通で、乗ってから1時間以内ならば、何回乗り換えても、一枚の切符でよいので、大変便利です。定期券を持っていると、市内を走っているどのバスでも、どの地下鉄でも制限なく自由に乗ることができます。

また、ウィークデーの日中は、ストックホルム市にはいる自動車は、交通税がとられますので、ある程度、市中に入る車は規制されていて、ひどい交通渋滞は起こりません。

しかし、冬のストックホルムは、日照時間が極端に短い上に寒さが厳しいので、生活するのは、なかなか大変です。雪が降るとすぐに凍って滑るので、舗道に砂利を撒いて、滑るのを防いでいます。塩化カルシウムや食塩などの融雪剤は、環境に良くないので、使われなくなっているようです。それに替わって、雪が降る度に、滑り止めに、砂利が撒かれます。雪が溶けて、シャーベット状になると、舗道が泥だらけになって、ジャリジャリして歩きにくくなります。しかし、環境に優しい砂利の方が、優先されるようになっています。4月になって、雪溶けがはじまると、道路の一斉清掃が始まり、舗道の砂利は吸引車が来て、きれいに吸い取ってくれます。そのときの砂利のなくなった舗道の歩きやすさで、冬の過ぎたのが実感できます。それまで、ストックホルムの人々は、ルチャ祭やクリスマスを楽しみながら、楽しい春が来るまで、長く、厳しい冬を耐えるのです。

日本では環境問題は、水俣病やイタイイタイ病などの公害病が深刻になって、その原因追究から始まったのですが、スウェーデンでは酸性雨によって、森や湖に被害が観察される自然環境の変化の原因究明として、1940年代から始まったと言われています。酸性雨は産業革命のイギリスで、1872年に、初めて報告されましたが、スウェーデンでは、森の木の立ち枯れや、湖の魚の死骸などの被害の原因として、明らかにされました。のちに酸性雨解明の父と呼ばれるようになる土壌学者 スヴェンテ オーデンの1957年から始まった10年間の研究によって、スウェーデンに降る酸性雨は、ドイツや東欧諸国から、飛んできた化石燃料に含まれる、硫黄や窒素の燃焼による酸化物が、雨に溶けて酸性雨となる事がわかりました。このように、酸性雨の問題は、北欧では一国の問題ではなく、国際問題として早い時期から知られていました。

スウェーデンでは、1979年頃には、85000ある湖沼のうち、9000の湖沼で、魚類の生息に悪い影響が出て、生石灰の撒布による中性化が、行われたところがあるそうです。ちなみに日本では、1983年から、酸性雨のモニタリングや、その影響に関する調査研究が開始され、欧米並みの酸性雨が、観測されています。スウェーデンの環境モニタリングの優れている

ことは、1987年4月に起こったチェルノブイリの原発事故を、2日後に空気中の放射能の測定から、ヨーロッパで最初に検出して、世界に知らせたことでも良くわかります。ちなみに、一昨年の福島原発事故による大気汚染も、建屋の水素爆発から9日目に、ストックホルムの大気フィルター観測所で、検出されています。

スウェーデンは、化石燃料からの脱却と、増大するエネルギーの確保のために、早期から原子力の開発に力を入れてきた国であり、1960年代から世界でも、その技術は最先端に位置しています。発電用の原子炉を米国の技術援助なしに、自国で開発した数少ない国の一つです。1970年代から、原発の建設を始めましたが、1979年に起きた米国のスリーマイル島の原発事故を契機に原発反対の声が大きくなり、1980年に行われた国民投票と、その後の国会決議により、30年後の2010年までに、スウェーデン国内の原発を全廃することが決定した。しかし、1980年代末になって、地球温暖化のリスクが一般に認識されるようになって、その原因が、化石燃料の燃焼による、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出であることが分かってくると、1997年には、全廃期限が撤回され、2010年には、古くなった原子炉の建替えを認めるなどの新政策が承認された。ちなみに、大気中の二酸化炭素の量の変化が、温室効果によって、地表の温度に影響を与えることを初めて明らかにしたのは、スウェーデンの化学者スヴェンテ アレニウスで、1896年の事と言われています。彼は、電解質理論や化学反応の活性化エネルギーを定式化した人として、大変有名です。

なぜ、スウェーデンが、一度決定した原発の全廃を撤回して、原発を推進したのだろうか。スウェーデン国民は、化石燃料に依存して自然環境を悪化させるよりも、原発を推進することによって、少しでもクリーンなエネルギーを、利用することを選んだのです。このことは1980年に行われた国民投票において、＜反原発開発、10年以内の原発全廃止＞に38.7%が投票しているのに対して、過半数以上の58%が＜化石燃料依存から脱却し、社会に十分なエネルギーを再生可能エネルギーで生産出来るようになるにつれて、徐々に原発廃止＞に投票している事からもうなずけます。つまり、＜脱原発＞よりも＜化石燃料依存からの脱却＞を優先しているのです。

振り返って、日本のことを考えて見ると、福島原発事故までは、クリーンなエネルギーを作るために、原発推進であった世論が、原発事故を境にして、一転して脱原発に変わってしまったのは、些か驚きであった。津波対策が、もう少し、しっかりしていれば、あれほどの事故にはならなかったのではないかと思います。大変残念なことである。最近の地球温暖化による異常気象や生態系への影響を考えると、直ちに、脱原発は難しいことである。しかも、日本は、化石燃料依存度がスウェーデンより、遙かに高いことを思うと、無理なことではないだろうか。将来、＜脱原発＞に踏み切るにしても、再生可能エネルギーで、代替できる見通しが出来るまで、どのような道筋があるのか、冷静に議論して、考える必要があるのではないだろうか。

Information Meeting on Danish, European and Japanese Funding Sources for Collaboration and Exchange においてJSPS事業説明

ユトランド半島の先端近くにあるオールボー大学で、同大学主催の「Information Meeting on Danish, European and Japanese Funding Sources for Collaboration and Exchange」が2012年11月27日に開催された。

日本側から、在デンマーク日本大使 佐野利男氏、日欧産業センター プロジェクトマネージャー 市岡利康氏、塩野義製薬 サブグループリーダー 浅木俊之氏、JSPSストックホルムセンター センター長 藤井義明、オールボー大学側からオールボー大学 B. Bertelsen氏 (元JSPS フェロー)、University Foundation, Technology directorである S.A. Nielson氏がそれぞれ、政府間、産業、会社、大学や留学生などの立場から話題を提供した。

Toft医学部長の挨拶のあと、市岡氏がFP7の成果、Horizon2020の見通し、J-Bilat projectの日本での活動などを紹介し、佐野大使が最近の日本とEU諸国及びデンマークとの科学技術協力の動きやアジアのハブとしての日本の役割などを話された。JSPSからはストックホルムセンターの北欧における役割、国際共同研究の助成やフェローシップ、デンマークにおける研究交流の実績などについて説明した。浅木氏は塩野義製薬のオールボー大学やヨーロッパのその他の大学との共同研究の状態について話し、Bertelsen博士はJSPSフェローシップで東工大に留学したときの有意義な経験について語った。

聴衆はデンマーク企業の研究者、大学職員、医学、工学、生命科学、エネルギー、ビジネス、政治学、社会学など幅広い分野のポストドクや研究者で70名を越えており、熱心にノートを取り、質問も多く、日本との共同研究や日本への留学などに対する関心の高さを示していた。

本会合には、元JSPS fellowのB. Bertelsen氏からの要請を受け手参加したところであるが、デンマークにおける日本への関心の高さを実感するいい機会であった。今後はJSPS fellowとの関係を構築するなど、この会合を契機にデンマークとの交流を開始したいと考えている。



慶應義塾大学 安井 正人 教授来会

2013年2月4日、慶應義塾大学安井正人教授が来会された。今回の来瑞では、2012年よりカロリンスカ医科大学・慶應義塾大学医学部・北京大学医学部の3校共同で実施されているサマープログラムの打ち合わせのため、カロリンスカ医科大学を訪問された。2012年には第一回が東京で実施され、実りのあるプログラムを実施できたことと、今後、メンター制度や単位互換制度などについての仕組みづくりを考えていきたいとの報告があった。

本サマースクールは、カロリンスカ医科大学においても重要なプログラムに位置づけられており、2013年はストックホルムで開催予定である。その際には当センターからもJSPSのフェローシッププログラムなどの情報を提供するなど協力したい旨を伝え、また今後北京で開催される際には、JSPS北京センターにもコンタクトを取り、現地開催時にJSPSのプログラムを紹介することなどを提案した。



東京大学教養学部 松尾 基之 副学部長とのミーティング

2013年2月14日、日本大使館において、東京大学教養学部松尾基之副学部長とミーティングを行った。松尾副学部長は、東京大学教養学部で2012年10月に設置されたPEAK(Programs in English at Komaba)プログラムにスウェーデンから教員を受け入れる協定締結に向けた打ち合わせのためSTINTを訪問された。

PEAKは教養学部で設置された英語による授業のみで学位を取得できるプログラムで、現在中国、韓国、シンガポール、ベトナム、インドなど30名の学生が在籍している。

また、学生の交換留学制度などについて話し合うためストックホルム大学を訪問されたとのことであった。

ミーティングには日本大使館の松本英登書記官、上田祥一書記官も同席され国費留学生プログラムの紹介や、ストックホルムセンターからはフェローシッププログラムの紹介など情報交換を行った。

大使館およびストックホルムセンターに、今後、STINTによって選ばれた教員の情報を提供いただくなど、引き続き連携を図っていくことを確認した。



九州大学 五十嵐 伸吾 准教授来会

2013年2月22日、九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター五十嵐伸吾准教授が来会された。五十嵐准教授は九州大学で2010年に始まったアントレプレナー教育に関して、スウェーデンの大学調査のため来瑞された。スウェーデンではアントレプレナー教育が進んでおり、王立工科大学、チャルマーシュ工科大学、ルンド大学、リンショーピン大学などがアントレプレナー教育に力を入れているとの報告があった。

昨年は九州大学へ、チャルマーシュ工科大学からインターンシップで3名の修士学生を受け入れるなど交流を行っている。現在は学部生対象の教育のみであるが、今後修士コースの整備をするため、チャルマーシュ工科大学で講義の組み立て方などを話し合われたということであった。ストックホルムセンターからは、センターの活動概要や、現地対応機関のプログラムの紹介をし、今後お互いに情報提供をしていくことを確認した。

在スウェーデン日本大使館主催新年祝賀会

2013年1月23日在スウェーデン日本大使公邸において2013年新年祝賀会が開催され、ストックホルムセンター職員も出席した。

当日は、長年スウェーデンに在住している日本人や日本企業の関係者、日本と関係の深いスウェーデン人が数多く集まり、武道の演武や合唱などの催しとともに、和やかな雰囲気の中懇親が深められた。



2012年ノーベルウィーク

12月7日

医学・生理学賞ノーベルレクチャー
文学賞ノーベルレクチャー

12月8日

物理学、化学、経済学賞ノーベルレクチャー
ノーベルコンサート

12月9日

ノーベルウィークダイアログ

12月10日

ノーベル賞授賞式
ノーベル晩餐会



2012年ノーベル賞授賞式がアルフレッド・ノーベルの命日にあたる12月10日（月）にストックホルムにて行われた。例年授賞式前後の1週間は「ノーベルウィーク」とよばれ、ノーベル財団主催の講演会や晩餐会など、様々な行事が行われており、世界中からの注目を浴びている。2012年は山中伸弥教授（京都大学iPS細胞研究所長）がノーベル医学・生理学賞を受賞され、日本にでもこれらの行事が連日報道されたところである。

山中教授は7日にカロリンスカ医科大学記念講堂においてノーベルレクチャーを行った。各国メディアや国内外の学生、研究者が700人以上集まり、講演会場の他にモニタールームも用意されたが、入りきれないほどであった。ご自身の経歴や研究にまつわるエピソード、恩師や共同研究者、家族への感謝の念をユーモラスに語られ、会場を大いに沸かせた。



同日夕刻には、カロリンスカ医科大学にて、関係者を招待したノーベルレセプションが開催され、山中教授とJohn B. Gurdon氏の共同受賞の祝福で盛況な賑わいを見せていた。山中教授は翌8日に在スウェーデン日本大使館大使主催の祝賀会に出席され、現在スウェーデンで研究を行っている日本人研究者らをご自身の留学時代の苦労話などを交えたスピーチで激励された。

また同8日にはストックホルム大学にて物理学、化学、経済学賞のノーベルレクチャーが行われ、1000人以上収容できるホールがゲストや学生を含む聴講者で埋まり大盛況であった。同日夕刻には、市内のコンサートホールにて、ノーベルコンサートが行われた。

9日には、2012年よりノーベルウィークの公式行事として始まった「ノーベルウィークダイアログ」が開催された。約1300人収容できるストックホルムシティカンファレンスセンターにはほぼ席を埋め尽くす聴衆が集まり、各講演や、1962年にノーベル生理学・医学賞を受賞したJames Dewey Watson氏へのステージインタビューに熱心に耳を傾けていた。

10日がノーベルウィーク本番で、ノーベルが亡くなった16時半よりコンサートホールにおいて授賞式が、その後市庁舎でロイヤルファミリーを迎えた晩餐会が開催された。これらの様子は現地TVでも中継されており、毎年、出席者の華やかなファッション、豪華なディナーや食器、各種ショーなどは市民からも高い注目を集めている。テレビではマデレーン王女をエスコートされ、楽しそうに談笑される山中教授の様子が長く放映されていた。

ノーベル賞授賞式、晩餐会には山中教授の研究に対して支援を行っているファンディング機関を代表して安西理事長もご出席され、山中教授の受賞を祝福された。安西理事長はストックホルム滞在中、カロリンスカ医科大学、ノーベル博物館、日本国大使館などを訪問され、日本とスウェーデンにおける学術研究に関する国際交流の推進のため、関係者との会談等を行われた。



❖ 安西祐一郎理事長コラム ❖

12月のストックホルム

12月9日の日曜日に成田を発ってフランクフルトに向かった飛行機は、空港吹雪で着陸不能のためミュンヘンへ航路変更・・・のはずが奇跡的に天候が回復、ミュンヘン回航決定の15分前にフランクフルト空港への着陸許可が出たようで、午後4時半無事着陸。さらに出発2時間遅れのルフトハンザ機に乗り、ストックホルムに着いたのは夜の10時ごろになっていました。もしミュンヘンに航路変更になっていたら、翌10日のノーベル賞授賞式には間に合わなかったかもしれません。

山中伸弥京都大学教授のノーベル賞受賞は、日本だけでなく世界の科学技術、とくに基礎科学にとってきわめて大きなできごとで、山中教授の研究成果は永遠に称えられるべきものです。第一に、いったん分化したら元には戻らないとされていた生物の細胞が多能性の幹細胞に「戻り得る」ことを科学的に示したiPS細胞の研究は、科学の既存概念を打ち壊す画期的な知見だったこと、第二に、これまでのノーベル賞受賞者に比べてずっと若く、日本の経済が右肩下りの時代になってから独立した科学者としての道を歩んだほぼ最初の世代であること、第三に、臨床医師の出身者である山中教授と工学部の出身者である高橋和利京都大学講師など、多様な軌跡をたどってきた優れた研究者のチームが努力して得た成果であることなど、とりわけ日本の科学技術や人材育成の新しい時代を象徴する特徴がいくつかあります。

今回のノーベル賞は基礎科学としての成果に与えられたものですが、今後は、山中教授も強調しているように、創薬や医療への応用を一日も早く成功させることが目標になります。それには、非正規雇用の多い研究支援者の雇用の仕組みの改革や、細かい研究資金を寄せ集めなくても研究のできる資金支援体制の確立、知財資金の支援、企業との柔軟な連携の支援、その他、規制緩和による研究開発の促進が重要です。

実は、これらはどれも日本の科学技術政策のボトルネックとして以前から指摘されていることで、それがなかなか解決できないこと自体が科学技術政策の大きな課題なのですが、この機会になんとか課題を乗り越えて、基礎研究と応用研究の実がともにあがるような科学技術立国としての姿を本当に確立したいものです。

ノーベル賞授賞式の壇上で堂々とメダルと賞状を受け取る山中教授を見てみると、日本人としての誇りと嬉しさを免れることはできませんでしたが、その一方で、式典や晩さん会が、日本でのテレビ報道などから受ける世界の式典というイメージとは違う、泥くさい手づくりの、スウェーデンらしい色彩の式典や晩さん会だったのが印象的でした。

たとえば授賞式では各賞の推薦者が推薦文を英語ではなくスウェーデン語で読み上げます。式典の会場も厳かで人々も華やかではありましたが、案内は学生がやっており、壇上の飾りつけも過度に派手でない簡潔なものでした。晩さん会の学生ウェイターやウェイトレスは礼儀正しくきびきびしてサービスも良いもので、アトラクションもとても簡素なもの。この意味では、式典の会場や晩さん会の状況についての日本の報道はミスリーディングで、むしろ、スウェーデンという国が堂々と世界に向かってアナウンスしている顕彰であり式典であり晩さん会なのだという当たり前のことにあらためて気づかされた機会でもありました。

北に位置するストックホルムの12月は、午後3時ごろには暗くなり始め、朝は9時ごろに空が明るくなってきます。雪のちらつく冬の暗い夕方に授賞式や晩さん会を催し、全面テレビ中継をしているのは、家に閉じこもりがちになる日々を明るく暮らそうとするスウェーデン人の知恵なのかもしれませんね。



山中教授と



カロリンスカ医科大学学長との会合



ノーベル博物館訪問

東北大学がスウェーデン王国王立工科大学(KTH)内にリエゾンオフィスを設置

これまでの経緯

東北大学とKTHは2000年に大学間協定を結び、その後金属材料研究所が中心となってリエゾンオフィスを2002年に開設した。その後2009年に工学研究科、農学研究科、情報科学研究科、環境科学研究科がダブルディグリープログラムを開始した。リエゾンオフィスは2011年に1度閉鎖された。これまでの10年間で東北大学とKTHとは派遣と受け入れを含めて200名を超え、オフィス閉鎖後も流体科学、機械工学および材料科学の分野で、多くの共同研究がなされ、積極的な活動を続けていた。そのため、流体科学研究所および工学研究科が中心となり、リエゾンオフィスを平成24年6月28日に再開設した。

若手共同研究促進シンポジウム

開所式に先立ち、流体科学研究所およびKTHによるシンポジウムが企画された。本シンポジウムは本所が行っている国際活動の一つであり、若手研究者による国際共同研究の促進を目的としている。東北大学からは徳増 崇准教授が、またKTHからはFredrik Lundell准教授がオーガナイザとなり、双方の若手研究者による発表が行われた。本シンポジウムの成果として、発表者全員がそれぞれに研究に即した共同研究者とテーマが見つかり共同研究が開始されることとなった。

リエゾンオフィス運営委員会および開所式

10月22日(月)の開所式に先立ちリエゾンオフィスの運営委員会会合が開催された。そこでは、1. 若手交流の活発化、積極的な支援、2. 二国間交流の支援事業への申請、3. 一周年記念セミナーの開催検討、4. 交換留学の促進、について話し合いがなされ、今後1年間の交流計画が立てられた。また、Fluid Physics Laboratoryの風洞などの実験施設の見学を行った。東北大学においても同様の研究施設をもつことから、非常に高度で専門的な質疑応答がなされ、有意義な見学であった。開所式は、10月22日(月)に16:20よりKTHのFluid Physics Laboratoryの棟内で行われた。まず、リエゾンオフィスのプレート前において除幕式を行った。次に式場へ移動し、まず東北大学理事(総務・国際展開・学術基盤担当) 植木俊哉教授が祝辞の挨拶を述べた。次に、スウェーデン王立工科大学副学長(国際交流担当) Ramon Wyss 教授が歓迎の挨拶をされた。Ramon Wyss 教授は、これまで日本と長年にわたり交流をされてきた研究者を紹介し、東北大学との交流が非常に多いことを紹介された。また、Gustav Amberg教授、Henrik Alfredsson教授、早瀬 敏幸教授、福西 祐教授から挨拶を頂いた。司会はK Venkat Rao教授が務めた。さらに、在スウェーデン日本大使館からは鈴木亮太郎公使、JSPSストックホルム研究連絡センターからは藤井義明センター長が来られた。終始なごやかに開所式は進み、シンプルかつ無駄のないセレモニーに仕立て上げられていた。

最後に本開所式を成功に導いて下さった関係各所の皆様にあつく御礼を申し上げる。一周年記念としてワークショップを9月に開催する予定としている。今後さらに多くの共同研究を通じた交流を積極的に行っていけるように努力していきたい。

東北大学流体科学研究所



除幕式



開所式の様子



記念撮影

日本人研究者へのインタビュー

JSPSストックホルム研究連絡センター 中島 麻里

デンマーク在住の日本人研究者、コペンハーゲン大学北欧アジア研究所 礪波亜希（となみあき）博士にインタビューをしましたので紹介します。

※現在の所属および渡航前の日本での所属機関と身分を教えてください。また、デンマークでの滞在期間はどのくらいになりますか。家族or単身でのご滞在ですか？

コペンハーゲン大学北欧アジア研究所に研究員として勤務しています。日本では外務省に勤務したほか、京都大学大学院地球環境学堂に日本学術振興会特別研究員(PD)として所属していました。デンマークには2011年7月に来て以来、1年5ヶ月になります。家族(英国人の夫、息子)と3人での滞在です。

※海外で研究をされるにあたり、なぜデンマークを選ばれたのですか。以前より海外で研究を行いたいと考えていましたか？

諸々事情はあるのですが、最終的にロンドンかコペンハーゲンという選択に迫られ、子育てしながら働くという面においては圧倒的にデンマークの環境の方が優れていたため、デンマークを選びました。海外研究については、ご縁があれば…という程度で考えていました。

※現在のデンマークでのポジションはどのようにして見つけましたか？（日本での上司のコネクション、学会等での繋がり、HPでの検索、等々）また、デンマークへの渡航までに要した準備期間はどのくらいですか？

就職の半年前前後、デンマーク人の知人の紹介を通じて研究所を訪れ、現在の上司となる人物に自分を売り込みました。その時は空気がなかったので就職には至りませんでした。HPをチェックしていたところ募集がかかったのが、応募しました。偶然ですが、事前に面接のようなものを済ませていたことが功を奏したようです。渡航準備には、ビザの申請や引っ越し準備、子どもの保育園のアレンジ等全て含めて、1年くらいかかったでしょうか。

※現在の滞在費及び研究費はどこから支給されていますか？（もし可能であれば）大よその金額（年）、プログラム名、獲得にまで至った手続き等を教えてください。

研究所から給与を受けています。その他、スカンジナビア・ニッポンササカワ財団、北欧閣僚理事会等からも助成金をいただいています。

※研究内容の概要について出来る範囲で教えてください。

日本及び東アジア諸国の開発援助、特に環境分野の援助政策について、比較研究を行っています。また、デンマークにあるアジア研究所という条件を活かして、日本をはじめとするアジア諸国の北極海政策についても比較研究を行っています。

※現在所属している研究室等の規模や人員構成等を教えてください。

北欧アジア研究所は、北欧(ノルディック)5ヶ国の大学・研究所の支援で運営されるアジア研究所です。研究者は専属が6名、フェローを含めると約30名が所属している他、ノルディック諸国及びアジアからの留学生が数名おります。

※日本とデンマークにおける研究環境の類似点、相違点を教えてください。

社会科学に関して言えば、理論研究を非常に重視するようです。デンマークでは博士課程研究員から給与が出ることも関係しているかもしれませんが、立場、年齢に関わらず一人のプロとして見られるので、結果を出すことを常に求められていますし、緊張感もあるように思います。また女性研究者の数、子育て中の研究者が多いので、励まされます。

※一般的な1日の生活スタイルを教えてください。

6時起床、8時家を出発、自転車で子どもを保育園に送った後、8時45分～12時30分までオフィスで研究業務。12時30分～13時はコモンルームで昼食(デンマークでは職場の皆で集い昼食を共にとることが重要なようです)、13時～16時までオフィスで業務、16時に子どもを保育園に迎えに行き、17時頃帰宅。夕食、片付け、風呂、子どもの寝かしつけなどを経て22時30分～23時就寝。

※一般的な1日の生活スタイルを教えてください。

近所の公園や動物園に子どもを連れて散歩、ヨガやジョギング、食材や日用品の買い物などに行きます。夏期などまとめてお休みを取れる時は、スペインやイタリアなど南の方の暖かいところに逃避します。

※生活面で苦労されていることはありますか？

言語、医療システムの違い、物価が高いこと、冬が長くて暗くて寒い、など。

※デンマークでの研究終了後の進路予定(希望等でも構いません)を教えてください。

夫婦共に外国人として第三国で暮らすことには、特に小さい子どもがいる場合、さまざまな困難があります。将来的には、できれば夫の出身地である英国、もしくは日本の研究機関で職を得たいと考えています。

※JSPSをご存知でしたか？JSPS orストックホルムセンターに対する要望等がありますか？

存じておりました。今後とも有用な情報を共有していただければ助かります。

※デンマークでの研究を考えている日本人研究者へのメッセージをお願いします。

若手研究者には、十分なお給料も出ますので、悪くない場所だと思います。是非チャレンジされてみてください。

礪波博士、ありがとうございました。子育てをされながらデンマークでご活躍されている様子をうかがうことができ嬉しく思います。

さて、本ニュースレターの編集も今回が最後となりました。1年間北欧諸国におけるセンターの活動や学術情報の発信に携われたこと、私自身とても勉強になりました。

引き続き、JSPSストックホルムセンターのニュースレターご購入よろしくお願いいたします。

中島 麻里

Anders Hamsten博士がカロリンスカ医科大学長に就任

2013年1月にAnders Hamsten博士が21代目のカロリンスカ医科大学に就任し、同25日、前Harriet Wallberg-Henriksson学長との交代記念シンポジウムおよび交代式が開催された。

同シンポジウムには2003年のノーベル化学賞受賞者Peter Arge博士や欧州委員会のAnne Glover博士らが講演を行った。

Anders Hamsten氏の在任中、若手研究者の研究活動の保障など、アカデミックキャリアの明確化と強化を目指し、大学をより研究者にとって魅力のあるものにしていくこと、また、創造的、活動的で熱意のある学生を獲得し続けるような、基礎教育の質を高めることを目指している。

「私は臨床の研究者、医師として30年以上の経験を有しており、カロリンスカ医科大学と医療システムの相互作用の発展に寄与することができるだろう」

任期は2018年12月31日まで。



略歴

1978年 カロリンスカ医科大学卒業
1981年 MD取得
1986年 PhD取得
1987年 Assistant Professor (at KI)
1999-2007 カロリンスカ医科大学医学部長
2004-2007 カロリンスカ医科大学病院
Head Thoracic Vascular 部門長

(参考)

カロリンスカ医科大学

<http://ki.se/ki/jsp/polopoly.jsp?d=130&a=157639&len&newsdep=130>

スウェーデン高等教育関係機関の統合

2013年1月1日より高等教育関係機関の統廃合により、以下の2機関が新設された。

- ①The Swedish Higher Education Authority
- ②The Swedish Council for Higher Education

この統合には、これまであった高等教育関係3機関を2機関にすることで、業務範囲をより明確化し、合理的にさせるというスウェーデン政府の目的によるものである。

各団体の具体的な取組は以下のとおり。

①The Swedish Higher Education Authority

旧機関The Swedish National Agency for Higher Educationの中の、主要な役割を引き継ぐ。

- 高等教育の質の評価
- 大学やカレッジの監督
- 教育に関する統計調査

University Chancellor: Lars Haikola

(2010年から旧The Swedish National Agency for Higher Educationの長)

②The Swedish Council for Higher Education

旧機関The Swedish National Agency for Higher Educationのその他の役割と、旧機関The International Program Office for Education and Trainingおよび旧機関The Swedish Agency for Higher Education Servicesが統合し、以下の役割を引き継ぐ。

- 高等教育へのアドミッションサービス
- 高等教育の広報
- 外国教育の評価
- 教育関係の国際活動のサポート
- 北欧-ヨーロッパの役人交換プログラム
- 差別の撤廃活動

Chairman: P-O Rehnquist (元ヨーテボリ大学理事)
Former University Director, Gothenburg University,

(参考)

The Swedish Higher Education Authority

<http://www.uk-ambetet.se/2.782a298813a88dd0dad80007209.html>

The Swedish Council for Higher Education

<http://www.uhr.se/sv/>

The Swedish National Agency for Higher Education

<http://www.hsv.se/nyamyndigheter/>

リサーチカウンスルの2013年度助成金の発表

スウェーデンリサーチカウンスルの2013年主な助成金一覧の発表があった。

スウェーデンリサーチカウンスルは、スウェーデン国内最大のファンディングエージェンシーで、科研費を配分している日本学術振興会と類似団体である。

助成金には、一般的な科研費のほか、国際会議経費、国際交流経費、ポスドクの海外派遣プログラム、教授招へいプログラムなどがある。

また、今後も状況に応じて順次追加のアナウンスメントがなされる予定である。

(参考)

スウェーデンリサーチカウンスル2013ファンド一覧
<http://www.vr.se/inenglish/researchfunding/ourgrants2013.44482f6612355bb5ee780002186.html>

欧州未来新興技術フラッグシップに、チャルマーシュ工科大学を採択

欧州委員会は、欧州未来新興技術（FET）フラッグシップに、スウェーデンのチャルマーシュ工科大学に2013年に立ち上げられる「グラフェン・フラッグシップ」を採択したことが1月28日、チャルマーシュ工科大学のプレスリリースと当地ダーゲンス・ニーヘーテル紙の関係記事により発表された。欧州未来新興技術（FET）フラッグシップは、欧州委員会が当初10年間にわたり総額10億ユーロの支援を行うものである。

グラフェン・フラッグシップはチャルマーシュ工科大学により主導されることとなっており、スウェーデンの研究機関としては他にカロリンスカ医科大学、リンショーピン大学、ウメオ大学が参加する。グラフェンは電子ペーパーや折り曲げ可能な個人用通信機器、より軽く燃費のよい航空機の開発、長期的には新たなコンピューター工学のパラダイムや人工網膜のような革命的な医療応用につながるものと考えられている。

(参考) チャルマーシュ工科大学

<http://www.chalmers.se/en/news/Pages/Graphene-appointed-an-EU-Future-Emerging-Technology-flagship.aspx>

セミナー・シンポジウムの開催

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしておりますので、ストックホルムセンターホームページをご覧ください。
参加は無料ですので、興味のある方はご参加ください。
お問い合わせは当センター info@jsps-sto.com までご連絡ください。
<http://www.jsps-sto.com/>

外国人特別研究員事業（欧米短期&一般）

外国人特別研究員事業（欧米短期&一般）（JSPS Postdoctoral Fellowship Program (short-term & standard)）は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。

●現在、北欧・バルト諸国の対応機関にて募集をしているほか、一般公募として、外国人特別研究員の受入れを希望する日本の研究者が、日本学術振興会へ申請する方法もあります。詳しくは日本学術振興会ホームページをご覧ください。

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fellow/index.html>

JSPS Stockholm News Letterの定期購読について

ニュースレターの定期購読（電子メールにて配信します）をご希望される場合は、機関名、部署、氏名及びメールアドレスを明記の上、info@jsps-sto.com までご連絡ください。
<http://www.jsps-sto.com/>

JSPS Stockholm News Letter 第37号

編集：中島麻里

発行日：2013年3月21日

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171-65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561 FAX: +46 (0) 8 31 38 86

Website: <http://www.jsps-sto.com/> E-mail: info@jsps-sto.com

JSPS
STOCKHOLM